

山國の星満開の雛まつり

藤田湘子

「山國の」と聞けば、まず高濱虚子の「山國の蝶を荒しと思はずや」を思わずにはいられない。虚子の句日記によれば、戦時中に小諸に疎開した昭和二十年五月十四日の作。そこは浅間山の麓の民家であつた。

湘子の句は昭和五十四年の作。日本アルプスや安曇野へもよく通つていた。私見ではあるが、この頃、高濱虚子や高野素十の俳句研究にも取り組んでいたのではないかと思つている。

「山國の」で一拍置いて「星満開」。読者が、花ではなく星でも満開と表現できるのかと疑問に思つた瞬間に「雛まつり」の下五。なるほど、室内では緋毛氈に飾られた雛壇と「桃満開」の映像が広がる。

1979年(54作)第五句集『春祭』 鑑賞・轍郁摩